

第 53 回文化講座

発掘調査速報 2012 その 2

【日時】 8月 18日 (土) 13:30 ~ 16:05

【会場】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター

第53回文化講座「発掘調査速報2012 その2」

平成24年8月18日(土) 13時30分～16時05分

あいさつ 沖縄県立埋蔵文化財センター所長 崎濱 文秀

宮国元島上方古墓群発掘調査 山本 正昭 …… 1

県内遺跡詳細分布調査 山本 正昭 …… 7

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 休憩 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

中城御殿跡発掘調査 羽方 誠 …… 11

戦争遺跡詳細確認調査 山本 正昭 …… 16

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 質疑応答 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

宮国元島上方古墓群発掘調査 ー主に 22 号墓を中心にしてー

沖縄県教育庁文化財課

主任 山本 正昭

はじめに

宮国元島上方古墓群の発掘調査は、平成 19 年度から平成 24 年にかけて行われる県道保良上地線工事に伴う記録保存調査です。それらは近世から近代にかけて造墓された古墓群で、主に崖を利用した岩陰墓が中心となっています。

宮国元島上方古墓群は宮国集落南東部に位置し、石灰岩の崖斜面に 30 基近くの古墓が点在しています。南側海岸線の眺望は極めて良く、うえのドイツ文化村や 14 世紀から 15 世紀に展開した宮国元島遺跡が眼下に一望できます。

平成 23 年度調査では、この古墓群の最も西端にあたる場所が調査対象で、2 基の古墓の確認、発掘調査を実施しました。この 2 基のうち 22 号墓から多くの興味深い成果が出たことから、この 22 号墓を今回の報告のメインとします。

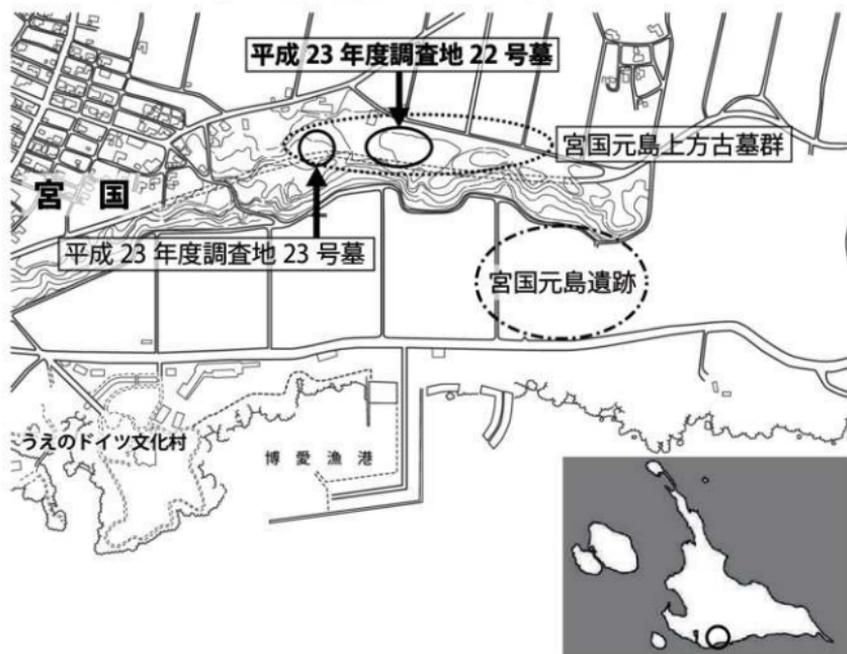


図 1 宮国元島上方古墓群位置図

1. 遺構

22号墓は宮国元島上方向古墓群の中でも、石灰崖上端部の平坦面に立地しています(写真1)。当該古墓群のほとんどが、石灰岩急崖面に構築されていることを考えると、極めて異質であると言えます。崖上端部に露頭した石灰岩岩盤の縁部分の岩陰を墓室とし、その東側前面を石積みで閉塞した、一見すると岩陰墓のような形態をしています(写真2)。墓口も設けられており、西側の墓庭に向けて開口していました(写真3)。

更に東側を石積みで囲われた墓庭も構築されていることから、当該古墓群の中でも規模の大きい部類に入る古墓と言えます。石積みを使用している石材は全て石灰岩の自然石で、積み方も雑な方であると言えます(写真4)。しかし、墓室の天井を覆う石はテーブル状の石灰岩を使用していることから、ある程度の構築方法に則して造墓されたものと思われる。

また、墓庭を囲う石積みの裏込め石に、大量の中国産陶磁器や沖縄産陶器、宮古式土器が混入していることを確認しました。これらは、墓の改築・改葬などで廃棄された日用雑器を、裏込め材として転用したことを窺わせます。

墓室は1m×1.5mとかなり狭小で、とくに岩盤を成形するなどの人の手が加わっている状況は見られませんでした。そして床面には10体を越える人骨が足の踏み場も無いほど散乱している状況でした。

これらの人骨は頭骨の下部に四肢骨が置かれていたことから、改葬されたことが考えられます。また人骨と共に沖縄産陶器の碗や短頸瓶、キセル、簪などが見られましたが、沖縄産陶器大型の甕や、宮古式土器の壺といった蔵骨器のような遺物は、墓室からは出土しませんでした。

最後に人骨取り上げ後、床面の発掘を行ったところ、すぐに岩盤面が検出されました(写真5)。そのことから、当初は岩盤面上に直接遺体を安置していたと想定されます。

2. 遺物

遺物は沖縄産陶器や中国産磁器などを中心に大変多くの遺物が出土しました。大型の沖縄産陶器壺や沖縄産灰釉碗(写真6)、同長頸瓶、本土産磁器、宮古式土器壺等が、墓庭部分からとりわけ多く出土しました。また墓庭のすぐ外側から宮古式土器壺の小片がまとまった形で多量に出土しました。大きさが一定していることや、胴部片のみに限られていることから、ある意図を持って一括で廃棄されたものと思われます(写真7)。また、これらの土器片と共に、肥前系の磁器(瓶子)が1点出土しているのを確認しました。

墓室からも多くの遺物が出土しましたが、先に述べたように蔵骨器となるような大型製品が出土しませんでした。蔵骨器から遺骨を取り出して、それらを墓室へ安置した後、墓庭およびその周辺にて蔵骨器を廃棄した可能性が考えられます。これらの遺物の年代は

17世紀後半から19世紀頃のものだと考えられます。また他に、墓室の床面からはガラス小玉が多く出土したことも注目に値します。

22号墓は宮国元島上方古墓群の中でも、とりわけ多くの量と種類の遺物が出土した古墓であるということが出来ます。

まとめ

これまで主に22号墓を中心に報告して来ましたが、ここで23号墓についても少し触れておきたいと思います。23号墓は22号墓の東側、石灰岩急崖の途中に構築されている岩陰墓です。遺物に関しては近代の陶器やガラス瓶などが出土していますが、量は少なく種類も限られています。また、遺構については墓口を塞いでいる石積みその他には、顕著な遺構は見ることができませんでした。宮国元島上方古墓群全体で見ると、23号墓は当該古墓群の中でも一般的なあり方であるといえます。

このように出土遺物の量並びに種類、そして立地状況から22号墓はこれまで調査された宮国元島上方古墓群の中でもひとときの特異な存在と言えます。他の墓と異なる要因としては、集落の有力者の集団墓であることや、集落の中でも特殊な役割を担った集団の墓、ある時期に各所に安置されていた骨をまとめて葬った合葬墓等が考えられますが、この22号墓については造墓主体者や所有者については文献資料や聞き取りなどでは不明となっており、現在のところ発掘調査による成果のみが当該墓を知る手掛かりとなっています。

また、宮古島における古墓の発掘調査事例では岩陰墓の調査が主で、これまで22号墓のような形態の古墓の調査事例は皆無でした。よって、今後においても墓そのものの形態のみならず、宮古島の葬制を考えていく上でも注目されていくべき古墓と言えるでしょう。



写真1
22号墓遠景（南から）



写真2
22号墓全景



写真3
22号墓 墓口開口状況



写真4
22号墓 墓庭平面状況



写真5
22号墓 墓室完掘状況



写真6
22号墓 墓庭出土状況



写真7
土器一括出土状況



発掘調査状況



実測作業状況

平成 23 年度県内遺跡詳細確認調査の概要

沖縄県教育庁文化財課

主任 山本 正昭

はじめに

平成 22 年度から県内各地（全域）を対象として実施している本事業ですが、平成 23 年度は座間味村において調査を実施しました。

座間味村は沖縄本島から西へ約 40km 離れた慶良間諸島の西半分を占める、14 の島々から成る離島村です。この 14 の島々のうち、有人島は座間味島（人口 645 人）と阿嘉島（人口 340 人）、慶留間島（人口 81 人）のみで、3 島以外は現在、無人島となっています。

昭和 55・56（1980・1981）年に沖縄県教育委員会が主体となって古座間味貝塚の発掘調査が実施され、先史時代の遺物や建物跡などが検出されたことから、座間味島では先史時代に人々が集落を営んでいたことが明らかにされました。そして、その後はグスク分布調査や戦争遺跡詳細分布調査が座間味村内において実施されていることから、それにより、断片的ではありますが、村内における遺跡の分布状況が明らかにされてきています。

今回の報告は、平成 23 年度に分布調査を行った中で、とりわけ特徴的な先史時代、グスク時代、近世、近代の遺跡の概要について報告していきます。

1. 先史時代の遺跡

座間味村内においてこの時期の遺跡としては古座間味貝塚、古座間味第二貝塚、座間味貝塚、慶留間遺跡、ウタハ貝塚、安室貝塚などがあります。この中で最も広範囲に広がる遺跡は古座間味貝塚です。古座間味ビーチの背後に広がる平坦地一帯に古座間味貝塚が広がっており、主に土器や自然貝を大量に表採することができました。またその近隣には古座間味第二貝塚もあります。この古座間味ビーチ一帯は先史時代において多くの人々が関わっていたと考えられ、過去の発掘調査では沖縄貝塚時代前Ⅳ期（3500～2500 年前）の時期までさかのぼる貝塚であることが確認されています。この古座間味貝塚以外の先史時代の遺跡では表採される遺物はかなり限られ、あまり分布域が広がらない小規模な遺跡が一般的です。

今回の調査では新たに、^{がひじま}嘉比島と安室島で遺物が散布している地点を確認しました。嘉比島では北側砂丘後背部で、安室島では南東部で、それぞれ土器や自然貝を表採することができました。両島とも現在は無人島であることから、先史時代のある時期に人が住んでいた可能性があります。また、この時期の遺跡のほとんどが東側の海岸に面する場所に立地していることから、渡嘉敷島を挟んだ海域を漁場としていたことと、渡嘉敷島の西海岸

にある渡嘉志久貝塚やリルカファ遺跡、阿波連貝塚等に関わっていた人々と交流していたことが考えられます。

2. グスク時代の遺跡

この時期の遺跡では積グスク、シルグスク、グスク山があります。積グスク、シルグスクでは野面積みの石積み配置されており、防衛的性格を見出すことができました。いずれも小規模で、シルグスクでは頂上部に狭小な平場が見られ、積グスクにおいて平場はほとんど見ることができませんでした。またいずれも島から突き出た岩山上に立地していることから、立地上の独立性を有した遺跡であると言えます。

グスク山は阿嘉集落の背後に位置する丘陵頂部に立地しています。石積みが配されていませんが、ある程度の広がりを見せる平場を2箇所確認することができました。平場の一隅には拝所が見られる以外には、とくに遺構等は確認できませんでした。

積グスク、シルグスクにはいずれもグスクの名が付され、石積み遺構が見られることから、この時代のものと考えられます。しかし、3箇所のグスクにおいて遺物を表採することができなかったことから、詳細な時期については良く分かっていません。

3. 近世期の遺跡

座間味村には、座間味集落、阿佐集落、阿真集落（座間味島）、阿嘉集落（阿嘉島）、慶留間集落（慶留間島）の5つの集落がありますが、いずれも近世期に形作られた集落になります。その中でも近世期における集落の名残を良く残しているのが阿佐集落です。阿佐集落の船頭役（船頭殿）は代々、中国への進貢船の先導役を務めており、その屋敷があった場所には立派な石垣を現在も見ることができます。そして、その屋敷周辺から中国産青花や本土産磁器、沖縄産陶器を今も表採することができます。また、集落内には古い屋敷の石積み囲いを見ることができ、近世期における集落の様相を色濃く残しています。

またこの時期の遺跡では狼煙台と伝承される場所があります。座間味島に番所山、阿嘉島に火立毛と呼ばれる場所はそれぞれ狼煙を上げたと言われており、前者では拝所と集石が、後者では拝所と平場が見られます。番所山は久米島方面と渡嘉敷島方面を、火立毛は渡嘉敷島方面をそれぞれ望むことができます。

4. 近代の遺跡

近代の遺跡では、現在無人島である屋嘉比島にかつて存在していた屋嘉比集落跡が、この時期の遺跡の中で最も規模の大きい遺跡となっています。屋嘉比島において銅鉛石が産出されたことを機に、明治期になって採掘が行われるようになります。その銅鉛石の採掘

に関わった人々が島の東海岸一帯に集落を営むようになります。戦後において廃村となつて以降は屋嘉比島に入島することは稀になってしまいました。現在、集落跡を踏査すると建物基礎やコンクリート造りの貯水池、そして排水溝などが残っているのを確認することができます。また、島東海岸南端にはコンクリート造りの栈橋を現在も見ることができます。

また、戦争遺跡も座間味村各地で見ることができます。沖縄戦時において海上挺身基地第1大隊が座間味島、同第2大隊は阿嘉島、慶留間島に配備されていました。それぞれの部隊が構築した特攻艇秘匿壕が現在も各島の海岸近くに残っています。そして、海上挺身基地第1大隊の本部壕が座間味集落の後方丘陵中腹に現在も残っており、周辺には退避用と思われる人工壕が10箇所近く見ることができます。

かつて座間味集落北側の山中に、軍以外の産業組合員の避難壕が構築されましたが、現在は道路拡張により完全に失われています。しかし、その周辺においても小規模な避難壕を1箇所確認することができました。また、阿真集落の東側丘陵中腹部においても避難壕を1箇所確認することができました。その壕の出入り口は2箇所あり、内部で繋がっている構造となっています。因みに、これら2箇所の住民避難壕はいずれも緑色片岩系の岩盤を掘り込んだものです。また、避難壕の中でも住民避難ではなく御真影を奉護するための壕を座間味島で確認しましたが、それは、一部コンクリートで構築されていることから、住民避難壕の造りとは異なるものでした。

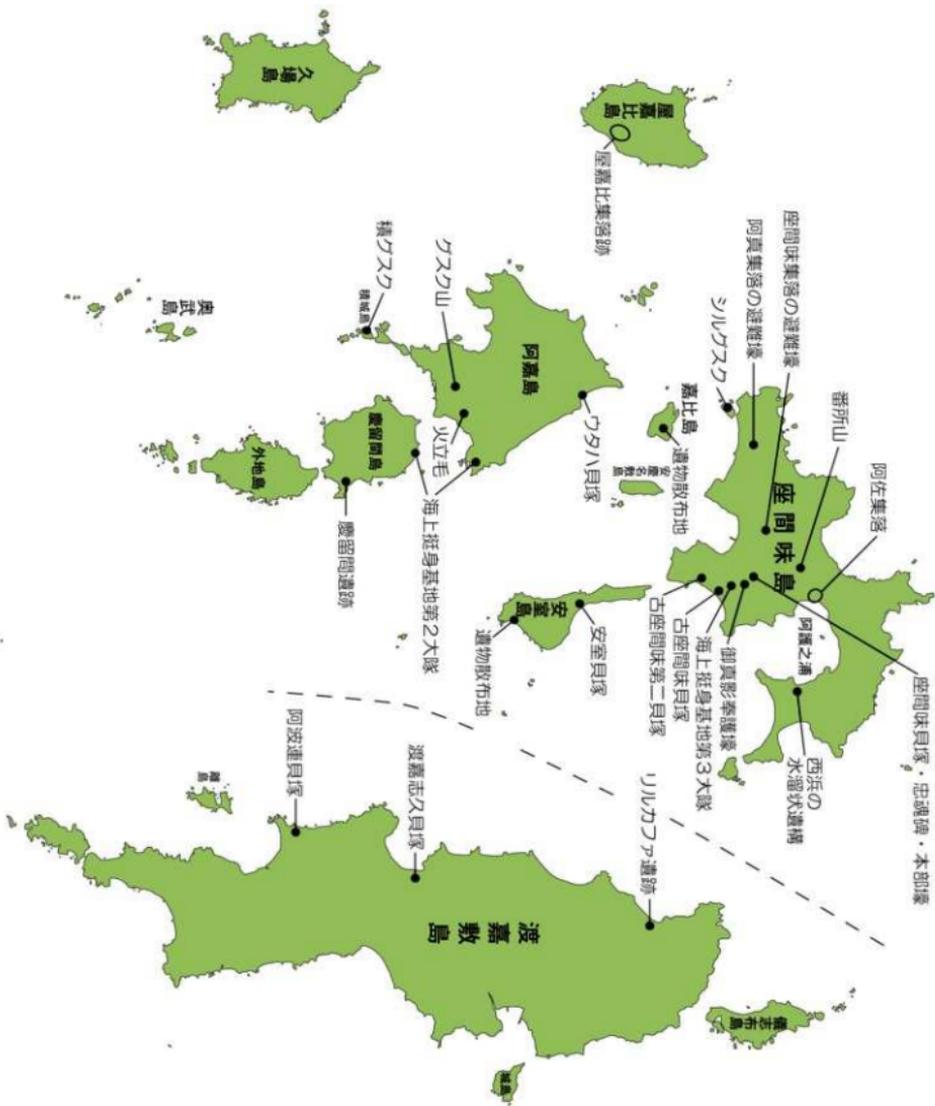
これら以外には、忠魂碑が座間味集落北側にある聖地、マカーの森内にて現在、見ることができます。1940（昭和15）年の皇紀2600年を記念して翌年建立され、以降は座間味集落の国威向陽のための記念碑として位置付けられていきました。また、石碑および台座には無数の弾痕が見られることから、当時の空襲の激しさを窺うことができます。

5. その他の遺跡

その他の遺跡としては、座間味島阿護の浦に面した西浜に、石積みで堰止めた水溜め状の遺構を確認しました。残存している石積みの高さは30cm前後で、野面積みの石積みが小川を横断する形態となっており、3箇所配置されているのが確認されました。また、小川の脇には高さ約1mの野面積みの土留め状石積みも見られることから、単純に水を溜めるための施設ではなく、本格的な水溜め機能を有していた施設であることも想定されます。踏査を行いました但遺物を表採することができなかつたため、時期の比定はできませんでした。

この場所は阿護の浦一帯において唯一、浦へ注ぎ込む河川です。かつて中国船の風待ちの浦として、この阿護の浦が利用されていたことが、文献資料から窺えます。このことから、この遺跡は風待ちの際の給水所として機能した施設の可能性も考えられます。

座間味村



渡嘉敷村

中城御殿跡発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査班 主任専門員 羽方 誠

中城御殿の歴史

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅である。当初その建物は、17世紀前半に首里真和志町（首里高等学校敷地内）に創建された。その後、1875（明治8）年に首里大中町（旧県立博物館の敷地）に移転し、1945年の沖縄戦で破壊されるまで存在していた。今回調査の対象としたのは、移転後の中城御殿である。

調査成果

平成23年度の調査では、敷地南側において7本のトレンチを設け発掘調査を実施した。

トレンチ1は庭園があった場所であるが、庭園は残っていなかった。

トレンチ2では、大広間の軒先のラインを示す石と掘り込みが見つかった。

トレンチ3では、中城御殿以前のもと考えられる石積みが見つかった。

トレンチ4では、御番所の軒先にあった石畳とそこから南に伸びる建物のラインが残っていた。また石垣は一番下の石が一部残っていた。

トレンチ5では、取納座の軒先にあった石畳と、そこから南に延びる石垣が残っていた。またサンゴ片を敷いた当時の地面が残っていた。

トレンチ6では、井戸を取り囲んでいた石積みなどを確認した。

トレンチ7では、30cm前後の石灰岩礫を多く含んだ造成層を確認した。またトイレ跡と見られる石組みを確認した。

また、正門の東側（トレンチ1～4）では地山のクチャが確認されたが、西側（トレンチ5～7）ではクチャが確認されなかったことから、西側では大規模な土地のかさ上げが行われていることがわかった。



中城御殿跡 間取り図、トレンチ配置図

西暦	元号	事項
1621～40	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	世子・中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰32/明治12年	鹿藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1945年	昭和20年	3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す
		4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵(肖像画)を御藏岩の後ろに移す
		4月10日頃 日本軍が殿を機関銃陣地にする(上之御殿、防空壕など) 戦後 一時引き揚げ者のバラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する
		7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する(～66年まで)
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地購入
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス(1951年に民営化)が当蔵へ移転
		10月 米国の援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の新館を建設 龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転 11月に開館
1972年	昭和47年	5月 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査実施
1992年	平成4年	県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査実施
1994年	平成6年	県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査実施
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が新館移転(おもろまち)のため休館
2007年	平成19年	県立埋蔵文化財センターによる調査開始

中城御殿跡関連年表



トレンチ1～4



トレンチ5～7



トレンチ2 大広間の跡



トレンチ4 石垣と石畳の跡



トレンチ5 収納座の石畳とサンゴ片を敷いた地面



トレンチ7 中城大親の土地造成の跡

戦争遺跡詳細確認調査

沖縄県教育庁文化財課

主任 山本 正昭

はじめに

平成 23 年度における本事業は、沖縄本島を中心に、主な戦争遺跡の確認調査を実施しました。沖縄戦が終わって 70 年近く経て、今なお戦争の傷跡を残している戦争遺跡は沖縄戦の実態を知る上で欠かすことのできない史料として、ますますその意義を深めています。言うまでもなく、沖縄県内各地域に残る戦争遺跡は、それぞれの地域における沖縄戦のあり方をそのまま示しています。よって戦争遺跡の実態に迫ることにより、聞き取りや文献資料などで得られる戦争の様子とはまた異なる側面が浮かび上がってきます。

本報告ではそれらの一部ではありますが、平成 23 年度に調査を行った戦争遺跡の種類ごとに触れていき、その特徴について以下に概説していきます。

1. 人工壕

人工壕については主に軍関係にかかわるものが多く、その用途としては陣地壕や退避壕などがあります。その規模については大小様々で、大規模なものでは那覇市田原のことぶき山の壕や今帰仁村渡喜仁の陣地壕が総延長 100m を越える規模を有しています。これらは、旧日本軍の陣地壕として構築されたもので、内部は小部屋や階段、そして通路も複雑に分岐するなど、かなり細かい構造となっています。

規模はあまり大きくありませんが山林内に複数の人工壕を配置する陣地壕群も確認しました。渡嘉敷村にある北山にしやまの陣地壕や、北大東村の黄金山くがにやまの本部壕は、谷地を利用して壕や陣地を巧みに配した陣地壕群です。また、具志頭村のクラシンジョウの壕は、大規模な壕を中心にして周辺には小規模な壕やトーチカなどが配されています。久米島町の宇江城岳山麓の壕や比嘉一本松の壕でも、周辺に多数の壕や多くの陣地に関わる施設を配置しているのが窺えました。

これらの壕群は、内部が複雑な構造となっている壕と、単純に一直線上に掘り込んだ壕と組み合わせている事例が多く見られます。

具志川城址（うるま市）の壕は実際に壕内外で戦闘が行われており、人工壕と自然壕で構成される戦争遺跡です。人工壕はいずれも小規模で、上記の壕とは少し様相を異にしていました。

また、うるま市具志川の海軍砲台跡については単独で配置された人工壕であり、その用途もきわめて限定的です。

民間人使用の人工壕は軍関係のものに比べて小規模でかつ数も限られています。それらの多くは非石灰岩地帯において見る事ができます。最も大規模なものは久米島町宇根の避難壕群で、その中でも喜久村家や仲原家の壕は、複数の壕口を有した避難壕です。また、名護市の国立療養所沖縄愛楽園（通称：沖縄愛楽園）内にある早田壕は、通路や複数の小部屋で構成される、総延長約40mにも及ぶ大規模な避難壕となっています。これらの壕以外では、波嘉敷村波嘉敷の避難壕、久米島町西銘のモートンダの壕、糸満市糸洲の第二外科壕の避難壕があり、いずれも奥行き10m前後程度の小規模な人工壕となっています。また、八重瀬町の翁長小の壕・ティダヌチチガマは、自然壕と人工壕を組み合わせた構造となる住民避難壕としてはあまり見られない戦争遺跡です。



波喜仁の陣地壕（今帰仁村）



喜久村家の防空壕（久米島町）

2. 自然壕

自然壕については主に民間使用のものが多くあります。とくに石灰岩地帯である沖縄本島南部において、密に分布している状況が見られます。八重瀬町の新里壕、久米島町のヤジャーガマ、北大東村の北泉洞は、自然洞穴をそのままほとんど改変せずに、住民避難壕として使用されていました。これらは空襲が激しくなっていくのに伴って、住民が自然洞穴を避難地として使用するようになっていきますが、とくに石灰岩で形成された洞穴が



新里壕（八重瀬町）



ヤジャーガマ（久米島町）

多く分布する地域においてはその傾向が多く見られます。

軍関係では、病院壕として利用された糸満市の伊原第一外科壕、伊原第三外科壕、陸軍病院山城本部壕の戦争遺跡を見る事ができます。いずれも沖縄本島南部へ撤退する過程で形成された戦争遺跡で、十分に壕を整備・構築する時間が無かったことから、自然洞穴をそのまま病院壕として、利用せざるを得なかったことが背景にあります。

これら自然壕において、伊原第三外科壕のように自然洞穴内の地形や、小面積の平場を活かして使用している状況が確認できました。また、沖縄本島南部の自然壕では、内部に多量の遺物（避難時に持ち込まれた日用雑器など）が散乱していることも特徴の一つとして挙げることができます。

3. 構築物

監視哨跡では久米島町の上田森の監視哨跡、嘉手納町の嘉手納監視哨跡、北大東村の掲揚台の監視哨跡は、建物基礎部分のみが残っています。

掩体壕えんたいでは沖縄市にある桜花の掩体壕跡と、那覇市にある海軍小禄飛行場の掩体壕があります。

前者においては6基、ほぼ完全な形で残っているものは3基ありました。後者は1基のみ見ることができますが、かなり小さいため、掩体壕として当時使用していたかどうか、再度検証する必要があります。

うるま市の大田の指揮所跡は眺望の利く丘陵頂部に立地しています。岩盤を掘り抜き、内部はコンクリートで覆われた小部屋で南北方向と東に向けて監視用の窓が設置されました。

那覇市の海軍砲台跡は、海軍小禄飛行場を守備するために配置された砲台です。大型のトーチカのようにコンクリートで全面を覆い、内部には大砲が残されています。この大砲は12.7せんちほう 榴砲で、最上型巡洋艦に元々取り付けられてあったものだと考えられます。



桜花の掩体壕跡（沖縄市）



上田森の監視哨跡（久米島町）

4. 建造物

与那城監視哨跡と本部の監視哨跡については、建物部分が残っている、全国でも貴重な戦争遺跡です。

与那城の監視哨跡は、機銃などによる一部破損が見られますが、ほぼ原形を保っています。また、この監視哨近くに退避用と思われる地下壕が残されていることも、とても重要な戦争遺跡として位置付けることができます。

一方で本部の監視哨跡は戦後の改修がなされていることから、原形からの改変は著しく、旧状をうかがうことは困難な状況となっています。

国威高揚のため建造された謝花国民学校の奉安殿（御真影と教育勅語を納めた）は当該学校の跡地に場所を変えず、当時の場所に建っています。奉安殿は鉄筋コンクリート造りで、内部に設置されていた柵などは撤去されていますが、外観はほぼ当時のまま残されています。

さらに建造物そのものではなく、壁に残された弾痕など、建造物に刻まれた戦争の痕跡を示す戦争遺跡も多数見ることができます。渡嘉敷村にある渡嘉敷神社鳥居の弾痕や、鯉節工場煙突の弾痕は、昭和20（1945）年3月に渡嘉敷島における戦闘の様子を物語る戦争遺跡であると言えます。その他、北大東村では旧東洋精糖北大東出張所建物にも、多数の弾痕を見ることができます。沖縄戦時には、北大東島において地上戦が行われませんでした。空襲による被害がありました。この弾痕は当時激しい空襲が北大東島であったことを、物語る戦争遺跡になります。



与那城の監視哨跡（うるま市）



旧東洋精糖北大東出張所建物の弾痕（北大東村）

各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難壕、障地、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、秘匿壕、監視哨、銃座、指揮所、不明、その他

形態：自然壕、人口壕、建造物、構築物、不明、その他

※主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

行事予定のご案内

企画展

重要文化財公開

首里城京の内跡出土品展

平成 24 年 11 月 3 日（土）～ 25 年 5 月 5 日（日）

おきなわ県民カレッジ連携講座

「グスクのはなし（仮）」

平成 24 年 11 月 10 日（土）13:00～

講師：當眞 嗣一（元沖縄県立博物館館長）

文化講座

入場無料・定員 140 名 会場：当センター研修室

第 54 回文化講座 首里城京の内出土品展関連講座

平成 25 年 1 月 26 日（土）

講師：金沢 陽（出光美術館）

小林 仁（大阪市立東洋陶磁美術館）

新垣 力（当センター）

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉球大学附属病院横）

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

- 開所時間 午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）
- 休所日 毎週月曜日、国民の休日（こどもの日、文化の日を除く）
年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所